

花伝書 風姿花伝第二、
物^{もの}学^{まね}条々

物^{もの}真^ま似^ねの品々、筆^つに^く尽^が難^たし。

さりながら此道^{かん}の肝^{よう}要^うなれ

ば、その品^{しな}々^ぐを、いかにも

く嗜^{たし}む^なべし。

凡^をそ何^な事^にをも残^{のこ}さず能^{よく}似^にせ

んが本^{ほん}意^いなり。しかれども

又、事^よに因^よりて、濃^こき淡^{うす}き

〔口訳〕

物真似の品々は非常に多く、悉くこれを記しあらはす事は出来難い。しながら、物真似こそは、能楽道の最も肝要なものであるから、その品々を十分に研究学習しなければならない。

一体物真似に於ては、何事をも、悉く似せるといふのが本意である。しかし、物事によつては、その真似かたの精疎の度合を考へねばならない。先づ、国王大臣を始めとして、公卿などの御

を知るべし。先、国王大臣より始め奉りて、公家の御起居、武家の御進退は、及べき所に非ざれば、十分ならん事難し。さりながら、能々言葉を尋ね、科を求め、見所の御異見を待べき

举措、又武家の御振舞などは、卑賤な自分等としては及ぶべき所でないから、これを完全に真似るといふことは不可能である。しかし、出来得る限り、これら高貴の方々の御言葉づかひや、御様子を尋ね研究し、又見所の高貴の方々の御批判を仰ぐやうにすべきである。其外、官位官職の高い方々の事や、花鳥風月の風雅な事がらの物真似は、能ふかぎり精細に似すべきである。しかし、田夫野人といふやうな、卑賤な者の物真似に至つては、さう細かく、賤しい業を似せてはならない。たとへ

者也。その外、上職の品々、花鳥風月の事態、如何にもく細かに為べし。田夫野人の事に到りては、さのみに細に賤なる態をば似すべからず。仮令、木樵、草刈、炭焼、汐汲などの風

ば、樵夫・草刈・炭焼・塩汲といったやうな者のわざで、それが芸の風情になりさうに思はれるやうな業は、細かに似せても良からうかと思ふ。が、それよりも尚くくだしい下賤な者のわざをば、似せてはならない。かやうなものは、高貴な方々の御目にかけてはならない。万一かやうなものを御覧に入れるとなると、あまりに卑しくて、面白い所など有らう筈がない。以上の按配斟酌をよくよく心得るべきである。物真似は人体によつて、その真似かたに精疎濃淡といふものがあるべき

情^{ぜい}にも成^{なり}つべき態^{わざ}をば、細^{こま}

である。

かに似^にすべきが、それより

尚^{なをくは}精^ししからん下^げ職^{しよく}をば、さ

のみに似^にすまじき也。こ

れ上^{うへつがた}方の御目に見ゆべから

ず。もし見えば、あまりに

賤^{いや}しくて、面白^{おもしろ}き所有^あるべ

からず。この宛^あて行^がひを能^よ

くく心得^ふべし。似^に事^{すること}の人^{にん}

体^{てい}によりて浅^{せん}深^{しん}あるべきな

り。

〔評〕

此段は、物真似の真似方についての総論をのべて居る。物真似としては、「何事をも残さずよく似せる」といふのが、その本旨である。又、か

やうにすべての尊卑雅俗を悉く似せることによつて、猿樂は老若男女都鄙貴賤に歓迎せられて発展して来たものであつたと思はれる。

然るに、猿樂が武家、貴族等の愛顧をうけるに伴つて、そこに高雅な風情を尊ぶ風がおこり、所謂幽玄を尊重するやうになつて以来、幽玄の理想に合しない物真似を淘汰するに到つた。その現れが「似する事の人体によつて深浅あるべきなり」となつたのである。従つて此の段の眼目はこの点に置かれてゐる。

高貴な人体、花鳥風月の風雅なわざは、どこまでも精細に似せる。下賤なものでは、樵夫・草刈・炭焼・塩汲の程度にとどめる。この下の限界を考へて見ると、それは和歌や連歌の中に詠ぜられる程度であることに気づく。そして其の程度ならば、これはたしかに花鳥風月の世界に調和し、芸の風情を生み出し得る。従つて貴族の賞玩にも叶ふといふわけである。